

## 団員報告

田 畑 悟

(富山県射水市立小杉中学校教諭)

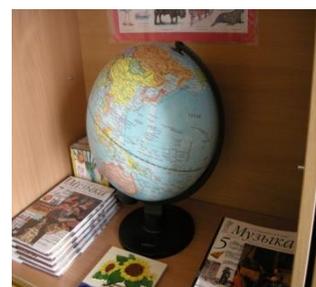
### 1 はじめに

私は今回、実際に国後島に行くことができるという機会を与えていただいた。今の国後島の様子と現地に住むロシア人の感情を知り、今後、北方領土を授業で扱う際の大切な資料づくりが、私の大きな目的であった。

### 2 古釜布中等学校訪問

古釜布中等学校を訪問した際、教室に地球儀が置かれていた。北方四島が日本の領土となっていないかった。

廊下には、成績優秀者の顔写真が掲示されていた。気になったのは、顔写真に穴がけられている等のいたずらがしてあったことである。こういった掲示物を見たとき、我々日本の教師はすぐにはじめの問題があるのではないかと推測する。そのことを教育関係者との意見交換



会で尋ねてみたところ、「そういったいたずらをする子は特定の子に対してではなく、誰に対してもする。心配はない。」とのことで、同級生に対して、あるいは下級生に対してもいじめはないとの説明であった。そのほか、非行についても話題に挙がったが、喫煙や人を殴る、窃盗、備品の破壊が問題の中心となっているとのことだった。問題行動を起こす生徒に対しては、放課後に教師と保護者で懇談を重ね、それでも改善がみられなければ警察や行政に介入してもらい、保護者に対して罰金を請求するとの説明であった。



日本の学校でも、そういった問題は生徒指導の対象となるが、問題のとらえ方や警察や行政との連携について感覚の違いというものを感じた。

しかし、保護者が気にしていることについては、第一に学力がしっかりと身に付いているかどうか、第二に友達とうまくやっているかであった。アンケートなどをとり、実態を把握することなども行われている。また、インターネットを利用する子どもが多くなっていて、読書量が少なく、知識欲がなくなってきたというのは、日ごろから私が感じていたことであり、共感できる部分であった。

### 3 ベーロチカ幼稚園訪問

幼稚園にはブランコなどの遊具が設置されていたり、園児たちが喜びそうなかわいらしい装飾が園内になされていた。そして、最も目を引いたのは、「ふるさと」をテーマに園児たちが描いた絵である。森や山、動物などが描かれた絵が並んでいる中には、サハリンや千島列島とともに北方四島を描いている絵があった。ロシア人の園児にとって、この国後島も自分のふるさとという認識をもって育ってい



るのかということを感じた。

### 3 ホームビジット

ロシア人のご家庭に、わずかな時間ではあるが、滞在することはやはり緊張するものである。ましてやロシア語をほとんど話すことができない私にとって、通訳の方がいない中でのコミュニケーションがうまくいくか不安でいっぱいだった。

しかし、いざ訪問してみると、ロシア人の方々が私たちに大変気を遣っていることがすぐに分かった。あいさつも日本語で話してくれ、言葉はよく分からなくても、そのしぐさに優しさがこもっていた。私がお世話になったガリーナさんは、過去に何度もこの日本人訪問を受け入れてくれており、ご本人も交流の一環として札幌等に滞在したことがある方であった。日本語も上手で、私たちの言わんとしていることを理解したり、翻訳してくれたりしたので、日本人通訳の方々が来られなくても、なんとかお互いの気持ちを伝え合うことができ、楽しい時間を過ごすことができた。



テーブルには、食べきれないほどの料理が並んでいた。私たちが料理に手をつけるのをじっと見つめ、食べる姿を不安そうに見ている姿が印象的だった。どの料理も日本人の口に合うように作られていることが分かる味で、ウォッカやワインなども、わざわざ日本製のものを用意してくれていたのには感動した。「食事中に何度も乾杯があるので、飲み過ぎには気を付けてください」と事務局から事前に注意説明を受けていたのだが、それについてもお酒を強要されるようなことは一切なく、むしろこちらの体調を気遣う言動が多かった。

### 4 おわりに

最も印象に残ったのは、ロシア人の中にも国後島に生まれ、郷土愛をもって育てている人が出てきているということである。日本本土には、国後島がふるさとでありながら、戻ることができない元島民の方々が大量にいらっしゃる。現在国後島に住むロシア人に対する対応を考えておかなければ、ロシア側にも日本と同じくつらい思いをする「元島民」を生み出すことになる。それを含めたうえで返還要求をしていく必要があると感じた。

また、古釜布の町などで会うロシア人がどの人も友好的であったことも印象深い。ホームビジットや訪問先で質問に答えてくれた方々だけでなく、広場で遊んでいる家族や道路ですれ違う人も笑顔で手を振ってくれた。正直、もっと強硬な態度で臨まれると思っていたので、意外だった。これも、おそらくはこれまでの交流事業の成果なのだと思う。この領土問題を友好的に解決するにはこういった交流が大切なのだとあらためて感じた。

今回の訪問で本当に多くの経験をさせてもらうことができた。そして、これから私ができることは、この経験をできるだけ多くの人に伝えていくことである。さっそく、勤務校では全校集会を行い、国後島の現状について生徒に伝えた。また、同じ市内の中学校に向いての報告会も行った。地図帳や教科書だけでは分からない国後島の写真やロシア人の様子に、生徒たちは関心をもって見たり聞いたりしてくれていた。いつか、堂々と自由に国後島に上陸することができる日を夢見て、私は私ができることの範囲の中で精一杯やっというと思う。